

## 第 116 回・日商簿記検定試験 2 級 第 1 問 仕訳問題類題

次の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は次の中から最も適当と思われるものを選ぶこと。

現金	当座預金	別段預金	受取手形
売掛金	売買目的有価証券	前払金	仮払金
立替金	備品	車両	支払手形
買掛金	未払金	仮受金	社債
利益準備金	別途積立金	繰越利益剰余金	車両減価償却累計額
本店	本店より仕入	支店向け売上	相模支店
伊豆支店	江戸支店	減価償却費	広告宣伝費
消耗品	支払利息	有価証券売却損	受取手数料
受取利息	有価証券売却益	損益	

1. 決算に際し、営業用の車両（取得原価 4,000,000 円、車両減価償却累計額 2,000,000 円、間接法で記帳）に対し、生産高比例法によって減価償却を行った。この車両の残存価額は取得原価の 10%、見積走行可能距離は 30 万キロであり、当期の実際走行距離は 3 万キロであった。
2. 平成 20 年 6 月 12 日に、売買目的で保有している取得価額 480,000 円、額面総額 500,000 円の国債を売却し、売買手数料 3,000 円を控除した金額 490,000 円が当座預金口座に振り込まれた。ただし、振り込まれた金額には端数利息が含まれている。この国債の利率は年 6% であり、利払日は毎年 3 月末日と 9 月末日である。なお、端数利息は 1 年を 365 日として日割りで計算する。
3. 板部岡商事株式会社は相模支店、伊豆支店、江戸支店の 3 つの支店を有しており、本店集中計算制度により会計処理を行っている。このような場合、伊豆支店が相模支店の広告宣伝費 100,000 円を現金で支払った取引について、本店で行われる仕訳を示しなさい。
4. 株式会社成田商会は、当期の決算を行った結果、6,000,000 円の損失を計上した。
5. 決算に際し、銀行の当座預金口座の残高と、当社の当座預金勘定残高の確認をしたところ、30,000 円の差額が生じていた。原因を調査したところ、未払となっていた消耗品代金支払いのために振り出した同額の小切手が手元に残っていることが判明したので、この修正のための会計処理を行った。

・解答

	仕訳			
	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	減価償却費	360,000	車両減価償却累計額	360,000
2	当座預金	490,000	売買目的有価証券	480,000
			受取利息	6,000
			有価証券売却益	4,000
3	相模支店	100,000	伊豆支店	100,000
4	繰越利益剰余金	6,000,000	損益	6,000,000
5	当座預金	30,000	未払金	30,000

・解説

1. 固定資産の減価償却に関する問題です。本問は生産高比例法により減価償却を行ってしまので、利用度に応じた減価償却費を計上することになります。

$$\text{取得原価 } 4,000,000 \text{ 円} \times 0.9 \times 3 \text{ 万キロ} \div 30 \text{ 万キロ} = 360,000 \text{ 円}$$

固定資産の減価償却に関する問題は第 104 回の問 2 でも出題されていますが、いずれも簡単な問題ですので必ず解けるようにしておいてください。

2. 有価証券の売却に関する問題です。本問は「有価証券を売却した仕訳」と「有価証券利息を受け取った仕訳」を分けて考えていきましょう。

ただ、問題文に「振り込まれた金額には端数利息が含まれている」とあり、売却損益を計算するためには、売却による収入と利息受け取りによる収入を区分して把握する必要がありますので、本問は先に「有価証券利息を受け取った仕訳」を切って利息受け取りによる現金収入額を確定させた上で、「有価証券を売却した仕訳」を考えていくことになります。

ではまず「有価証券利息を受け取った仕訳」を考えていきましょう。問題文に「利息の計算は 1 年を 365 日として行っている」とありますので、前回の利払日の翌日から売却日までの 73 日分（＝30 日＋31 日＋12 日）の有価証券利息を認識することになります。これは以下のような計算式で算定す

ることになります。

$$500,000 \text{ 円} \times 6\% \times 73 \text{ 日} \div 365 \text{ 日} = 6,000 \text{ 円}$$

よって解答すべき仕訳は以下のようになりますが、本問の問題文で与えられている勘定の中に有価証券利息勘定がありませんので、**受取利息勘定を使って仕訳を切る点**に注意してください。

★解答①

(借) 当座預金 6,000 / (貸) 受取利息 6,000

これで利息受け取りによる現金収入額が判明しましたので、 $490,000 \text{ 円} - 6,000 \text{ 円} = 484,000 \text{ 円}$ が売却による現金収入額ということになります。では次に「有価証券を売却した仕訳」を考えていきますが、こちらは簡単なので特に問題はないと思います。有価証券の売却損益は、**帳簿価額と売却価額の差額**で求めることができます。

■有価証券の帳簿価額 = 480,000 円

■有価証券の売却価額 =  $490,000 \text{ 円} - 6,000 \text{ 円} = 484,000 \text{ 円}$

■差額 = 4,000 円 (帳簿価額 < 売却価額・・・売却益)

★解答②

(借) 当座預金 484,000 / (貸) 売買目的有価証券 480,000  
(貸) 有価証券売却益 4,000

最後に2つの仕訳をまとめて解答用紙に記入すれば完了です。なお、本問の問題文で与えられている勘定の中に支払手数料勘定がありませんので、**売買手数料は有価証券売却損益勘定に加減して処理する点**に注意してください。

☆参考・売買手数料を支払手数料勘定を使って処理する場合

(借) 当座預金 484,000 / (貸) 売買目的有価証券 480,000  
(借) 支払手数料 3,000 (貸) 有価証券売却益 7,000

有価証券の売却に関する問題は、第105回の間2や第107回の間1、第111回の間1、第113回の間2、第118回の間4、第119回の間3、第121回の間2、第122回の間3、というようによく出題されていますので、きちんと過去問対策をするようにしてください。

3. 本支店会計に関する仕訳です。支店間取引に関する論点としては、「本店集中計算制度」と「支店分散計算制度」がありますので、ここで両者の概要を確認しておきましょう。

本店集中計算制度とは、支店間取引をそれぞれの支店が記帳する場合に、本店を相手にすべて取引したものとみなして記帳する制度のことを言います。各支店では本店勘定のみを設定し、本店では各支店の勘定を設定することになります。本店集中計算制度は、本店が「本店⇄支店」の取引だけでなく「支店⇄支店」の取引まで全て把握することが出来るので、本店による支店管理の観点からは望ましい制度なのですが、記帳事務が煩雑になってしまうというデメリットもあります。

一方、支店分散計算制度とは、支店間取引をそれぞれの支店が記帳する場合に、本店を経由することなく、取引の事実に従って記帳する制度のことを言います。各支店では本店勘定だけでなく取引のある各支店の勘定を設定し、本店では各支店の勘定を設定することになります。支店分散計算制度は、本店集中計算制度に比べて記帳事務を簡略化することが出来ますが、本店が「支店⇄支店」の取引をリアルタイムに把握することが難しくなるといったデメリットもあります。

一通りの確認が終わったところで早速問題を解いていきますが、本問は、【伊豆支店の仕訳】【江戸支店の仕訳】【本店の仕訳】と3本に分けて考えると分かりやすいです。

☆参考・伊豆支店の仕訳（本店を経由して、相模支店の広告宣伝費を支払う）

（借）本店 130,000 / （貸）現金 130,000

☆参考・相模支店の仕訳（本店を経由して、伊豆支店に広告宣伝費を払ってもらう）

（借）広告費 130,000 / （貸）本店 130,000

★解答・本店の仕訳

~~（借）広告費 130,000 / （貸）伊豆支店 130,000~~

（借）相模支店 130,000 / ~~（貸）広告費 130,000~~

では、支店分散計算制度もここで押さえておきましょう。支店間取引について、本店を経由させる必要はありませんので、本店集中計算制度よりも簡単です。

☆参考・伊豆支店の仕訳

（借）相模支店 130,000 / （貸）現金 130,000

☆参考・相模支店の仕訳

（借）広告費 130,000 / （貸）伊豆支店 130,000

☆参考・本店の仕訳

仕訳なし

本支店会計に関する問題は、第 107 回の問 5や第 121 回の問 1でも出題されていますので、併せてご確認ください。ただ、第 107 回の問題はかなり難しいので、費用対効果を考えるとバツサリ切るのも 1 つの手です。

4. 損失に関する問題です。ここでは、簡単な設例を使って決算振替仕訳の流れを確認していきましょう。仮に、決算整理後の諸費用が 10,000,000 円、諸収益が 4,000,000 円だったとします。まずはこれらを損益勘定に振り替え差額（当期純利益または当期純損失）を認識します。

☆参考・諸収益を損益に振り替える仕訳

（借）諸収益 4,000,000 / （貸）損益 4,000,000

☆参考・諸費用を損益に振り替える仕訳

（借）損益 10,000,000 / （貸）諸費用 10,000,000

この 2 つの仕訳により 6,000,000 円の当期純損失を認識することが出来ますので、当該差額を繰越利益剰余金勘定にさらに振り替えます。

★解答・損益を繰越利益剰余金に振り替える仕訳

（借）繰越利益剰余金 6,000,000 / （貸）損益 6,000,000

決算振替仕訳に関する問題は第 109 回の問 2でも出題されていますが、難易度の割りに出題可能性の低い論点になりますので、時間がない方はバツサリ切るのもひとつの手だと思います。

5. 銀行勘定調整表に関する問題です。ではさっそく問題を解いていきましょう。問題文に「未払となっていた消耗品代金支払いのために振り出した同額の小切手が手元に残っていることが判明した」とありますが、これはいわゆる「未渡小切手」というものです。

小切手を振り出し、支払いが完了したものとして処理していたが、実は先方に小切手を渡しておらず、金庫の中に小切手が眠っていたので、当座預金の減少を取り消すとともに、消耗品代金の未払いについては、未払金勘定を使って処理することになります。

☆参考・既に切っている仕訳

（借）消耗品費 30,000 / （貸）当座預金 30,000

★解答・未渡小切手を認識する仕訳

(借) 当座預金 30,000 / (貸) 未払金 30,000

ちなみに、買掛金について未渡小切手があった場合には未払金勘定ではなく買掛金勘定になりますので、間違えないように注意してください。

☆参考・既に切っている仕訳

(借) 買掛金 30,000 / (貸) 当座預金 30,000

☆参考・未渡小切手を認識する仕訳

(借) 当座預金 30,000 / (貸) 買掛金 30,000

銀行勘定調整表に関する問題は、第100回の問4や第101回の問1、第105回の問4、第111回の問2、第113回の問4、第115回の問5、第123回の問1でも出題されていますので併せてご確認ください。最近は、以前に比べると出題頻度が低くなっていますので、過去問レベルの問題が解ければ十分だと思います。